

平成 25 年度「卓越」補助金 論文作成支援報告書

梶村美紀（アジア）

日本定住ビルマ人の変容：少数民族と多数派バマーのエスニシティを超えた連帯

Transformations in minority-majority ties of people from Burma residing in Japan

本稿の目的は、日本定住ビルマ人の来日後に考察される行動および意識の変容を分析することである。先行研究では重視されていないビルマの多民族性に留意し、1988～2013年の四半世紀にわたる日本定住ビルマ人の意識の変容について、少数民族とバマー（ビルマ民族）とのエスニシティを超えた新たな連帯を実証的に検証した。これまで具体的に明らかにされていなかった少数民族がおかれた立場に着目しつつ、日本定住ビルマ人を生み出す背景、エスニシティを超えた連帯、そして、日本社会とのかかわりという3点を議論し、バマーとの間に育まれているエスニシティを超えた連帯を実証し、ここに見出せる意義を究明した。

日本定住ビルマ人によって構築されたエスニシティを超えた連帯は、定住ビルマ人の四半世紀におよぶ日本滞在の総括と捉えることができる。民族的な観点からみると、ビルマ少数民族とバマーの連帯が実現していると捉えることができ、本国ビルマで独立以来の中心課題でありながら、実現できていない両者の連帯を、日本定住ビルマ人が体現しているという点に大きな意義が見出せる。さらに、このエスニシティを超えた連帯は、日本における外国人のあり方、さらには日本人のあり方を問う契機としても意義深い。定住ビルマ人は今後「在日ビルマ人」として生きていく可能性が高く、より長期的に捉えると複数のアイデンティティを兼ね備えた「ビルマ系日本人」というカテゴリーがうみだされる可能性もある。本稿の結論は、日本定住ビルマ人研究への貢献とともに、将来の日本およびビルマの両国にとって定住ビルマ人がいかに重要な存在になりうるかを提示し、さらに日本社会における必然的な変容を通して、外国人/日本人とは誰かを考える契機となる。

ファイナル・コロキウム実施日：2013年9月12日

審査委員：古田元夫（地域文化研究専攻、主査）、佐藤安信（地域文化研究専攻）、外村大（地域文化研究専攻）、根本敬（上智大学）